

()

『和泉式部日記』の研究

――『和泉式部日記』の特徴と

「日記」として描かれている理由――

997102

古家志津

()

25
文
字
×
16
行
×
2
頁

目次

はじめに

1

第一章 贈答歌からみる『和泉式部日記』の特徴

3

第一節 『和泉式部集』の日記重複歌との

比較をとおして

3

第二節 連句二首をとおして

22

第三節 一般的な贈答歌との比較をとおして

32

第二章 地の文からみる『和泉式部日記』の特徴

52

第一節 「詞書」と「地の文」の

比較をとおして

52

第二節 式部が知らないはずのことまでも

描かれている理由

65

第三節

「女」という三人称で

描かれている理由

終わりに

注

参考文献

はじめに

本論では、『和泉式部日記』の特徴を考えていくことと併せて、この作品が、歌人として名高かった和泉式部のものであるにもかかわらず、「家集」という形ではなく、「日記」という形態をとった理由をも考えていくことを目的としている。

第一章では、和泉式部の作品集として編まれている『和泉式部集』中の日記重出歌と『和泉式部日記』中の贈答歌と言葉の違いを比べていくことにより、それがどのように違い、どのような意味を持つのかを考えていく。また、『和泉式部日記』中にある連句二作についても、『和泉式部集』とは形態が違っているものもあるもので、その違いを中心として比較しながら考察する。更に、一般的な贈答歌と比べた時、『和泉式部日記』中の和歌に特色があるのかということ考察していく。

第二章では、「日記」という形をとっていった理由を、
『和泉式部日記』の地の文と『和泉式部集』における詞
書とを比較しながら見ていく。また、「女」という三人
称で描いていった理由、さらに帥宮の心情や周囲の人た
ちの言葉などまでも、描いていった理由、などを考察し
ていきたい。

一章 贈答歌からみる『和泉式部日記』の特徴

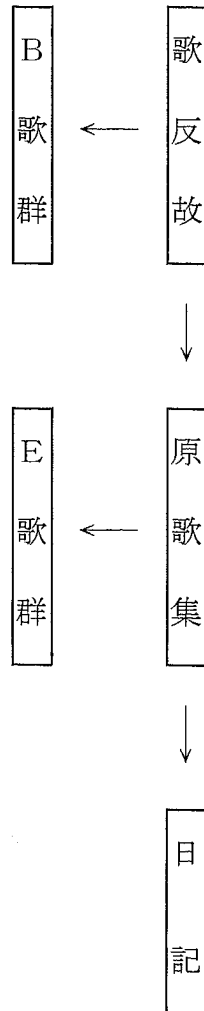
一節 『和泉式部集』の日記重複歌との

比較をとおして

『和泉式部日記』（以下『日記』とする）の主人公である和泉式部の和歌を「家集」としてまとめたものに、『和泉式部集』（以下『家集』とする）がある。この『家集』の中には、「日記重複歌群」と呼べるものが、三箇所に分かれて載せられている。この『家集』の日記重複歌群と『日記』との間には、何らかの関係があると考えてよいだろう。しかし、『日記』と『家集』との関係や成立については、未だはっきりしたものがあるとは言えない。その中でも主流なっているものとして、

日記と直接関係があるのはB歌群及びE歌群であるが、この両群と日記との関わり方は、必ずしも一

様ではない。私見によれば、E歌群に入る日記歌は、日記の原型と目される「原歌集」（帥宮と式部との恋愛時代の贈答歌を中心とした歌日記風のもの）から抄出されたものと考えられるが、B歌群に入る日記歌は、さらにその「原歌集」の資材となった「歌反故」の類に拠ったものと思われる。



（清水文雄¹著）

和泉式部正集には、和泉式部日記と重出する歌が六十余首、三群に分かれて存在している。……この内第二群と第三群は、清水文雄博士の説かれたように、元来は第三群の後に第二群が続くという形を成していたと推定されている。その推定される

形のもを以下日記重複歌群と呼称して扱っていき
たい。……第一群の重出歌は式部の歌反古からでた
と考えられ……。と

日記重出歌群は和泉式部集の補遺として、和泉式
部日記から式部の歌を抄出したものであったという
結論を得る。

(森田兼吉 著²⁾)

以上のような二つの論がある。『家集』を基にして『日
記』が創られたのか、『日記』の中の和歌を『家集』の
日記歌群として抄出したのか、または「原歌集」と呼ば
れるものがあつたのか、ご意見が分かれている。『日記』
と『家集』を比較していこうとする時に、このような成
立論を無視していくことはできない。しかし、今回私は、
『日記』と『家集』のどちらが原形で、どちらが正しい、
ということを明らかにしていくことに重点を置いている
わけではない。よって、この成立論については、念頭に

置きながらも、これ以上深くみていくことをしないことを断っておきたい。

『日記』の中にでてくる歌は、四七首（連歌は二首に数えた）あり、その中で『家集』と重出するものは六五首（内三首はそれぞれ他の一箇所³に重出する）ある。この六五首の中から、『日記』と『家集』で言葉が大きく違っているものを中心に、『日記』の特徴を考えていき

1

『家集』⁴

帥の宮、橘の枝を給はりたりし

227 薫る香をよそふるよりは郭公

きかばや同じ声やしたると

返し

228 同じ枝に鳴きつつをりし郭公

声はかはらぬ物としらなむ

『日記』⁽⁵⁾

……(小舎人童)「……いとけかくおはしまして、『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と申し候ひつれば、『これもて参りて、いかゞ見給ふとて奉らせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花を取り出でたれば、「昔の人の」といはれて、「さらば参りなん。いかゞ聞えさすべき」といへば、ことばにて聞こえせんもかたはらいたくて、なにかは、あだくしくもまだ聞え給はぬを、はかなきことをも、と思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥

聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、この童かくれの方にけしきばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

同じ枝に鳴きつゝをりし時鳥

声はかはらぬものとしらずや

と書かせ給ひて、給ふとて、「かかる事、ゆめ人に
いふな。すぎがましきやうなり」とて入せ給ひぬ。
もて来たれば、をかしと見れど、つねはとて御返聞
えさせず。

和泉式部の贈った歌「薫る香」の歌の中の「薫る香」
は、帥宮の贈った花橘の香りであり、これは「さつきま
つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という歌を
下地にしてあることは言うまでもないことであり、昔の
人のことを思い出すということから、故宮である為尊親
王を表すことは疑いの余地はない。これについては「薫
る香を」であれ「薫る香に」であれ違いはない。それで
は意味の上でも違いがないのかというと、そのようなこ
とはない。『家集』のように「薫る香を」となった場合
は、表にでるもの、強く前面に押し出されているものは、

「薫る香」に例えられている故為尊親王となる。それに對して『日記』のように「薫る香に」という表現であれば「よそふる」ものの方が押し出されてくる。「薫る香」に「よそふる」ものⅡ郭公である帥宮に主眼がおかれることとなる。故為尊親王に事寄せて式部の反応を見ようとした帥宮に對して、故宮を主体とした返事の『家集』よりも、故宮をふまえつつ、帥宮を主体とした返事となっている『日記』の表現の方が、より機知に富んでおり、帥宮に對する——故宮を媒介としたものではあるが——隠そうとしても隠しきれない興味を持った様子が現れているのではないだろうか。

これに對する帥宮の返歌「しらなむ」と「しらずや」の違いについてであるが、『家集』の方の「しらなむ」の「なむ」は、あつらえの終助詞で、式部の贈歌の「きかばや」の「ばや」という願望の終助詞に對應している。「なむ」を使うことによつて「故兄宮と同じ声——兄宮

と同じ気持ちであなたを思っていることを知つて欲しい」という、帥宮からの訴えとなる。式部の贈歌に使われていた「郭公」に自分が例えられていることをふまえてはいるものの、ある意味一方的言い方であろう。それに対して『日記』中の「しらずや」の「ずや」という、打ち消しの助動詞「ず」と強い疑問や反語を意味する「や」という助詞を使用することにより、「故兄宮と同じ想いである私の気持ちを知らないのですか。分かつているのでしよう」となり、相手（式部）に対して語りかける口調、より相手の気持ちに添った言い方になっていくのではないだろうか。また、今後の展開を予測させるものとしては、「ずや」を用いる方が、通り一遍の挨拶ではなく、二人の関係をより期待させるものとなっている。といえる。

2

『家集』

大雨の朝、「宵はいかゞ」と、
宮よりある御返事

229 夜もすがら何事をかは思ひつる

窓うつ雨の音を聞きつゝ

かへし

230 我もさぞおもひやりつるよもすがら

させるつまなき宿はいかにと

『日記』

五月五日になりぬ。雨なほやまず。一日のかへりの常よりも物思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、「今宵の雨の音は、おどろくしかりつるを」などのたまはせられたば、

夜もすがら何事をかは思ひつる

まどうつ雨のおとをききつゝ

陰にゐながら、あやしきまでなん」と聞えさせたれ

ば、なほいふかひなくはあらずかし、とおぼして、
御かへり、

我もさぞ思ひやりつる雨の音を

させるつまなきやどはいかにと

帥宮の返歌において、『家集』では「よもすがら」が使われ、『日記』では「雨の音を」が使われている。「よもすがら」の方は、帥宮からの「宵はいかが」の言葉に對して式部が使用した「夜もすがら」をふまえて返歌をしたもので、きちんと対応したものであると言える。それに対して『日記』では、式部の使用した「窓うつ雨」を下地として「雨の音」に主眼をおいている。式部の歌の「窓うつ雨」という語句は、藤岡忠美氏が指摘なさつておられるように、『和漢朗詠集』⁶⁾の中にある「秋夜」⁷⁾がふまえられていることは疑いないだろう。「この句は、宮女の孤独憂愁のさまを叙した部分で、単に夜中のあわれを情趣的にうたうものではない」⁸⁾とあるように、帥宮

の訪れがないことを、宮女の気持ちに添った形で式部が表現している。その式部の気持ちを帥宮がくみ取った形で展開されている。

つまり、「よもすがら」という形の上ではまとまっているが、漠然としていたものが、「雨の音」というより具体的なものに焦点を絞ることで、二人の心の結びつきの深さ、お互いの気持ちをくみ取っている様子を際だたせている。

3

『家集』

「鳥の声にはかられて、急ぎ出でて、憎かりつればころしつ」とて、羽に文をつけてたまへれば

879 いかがとはわれこそ思へ朝な朝な

なをきかせつつとりのころせば

『日記』

……しばしありて御文あり。「今朝は鳥の音におどろかされて、にくかりつればころしつ」とのたまはせて、鳥の羽に御文をつけて

ころしても猶あかぬかなにはとりの

折節知らぬ今朝の一声

御かへし、

いかにとは我こそ思へ朝なく

鳴き聞かせつる鳥のつらさは

『家集』においては、帥宮がどのような歌を詠んだのか、ということとは記されていない。しかし、「殺す」という語が入っていたということは推測に難くない。帥宮が言葉でも歌でも使用した「殺す」という表現は、雅を指す和歌の世界には似つかわしくない表現だろう。実際、「八代集」の中にはこの「殺す」という言葉を使った和歌は入集していない。いくら何でも、あまりにも直接的な表現だと言わざるを得ないだろう。しかし、鳥の

羽につけて、後朝の別れのつらさを詠み込んだこの歌を
 受け取った式部は、おそらく、この遊び心あふれる演出
 に思わず微笑んだのではないだろうか。だからこそ、『家
 集』では同じように「とりのころせば」という「殺す」
 という表現を織り込んだのであろう。しかし、これでは
 一緒になつて悪のりをしている感を与えてしまう。それ
 に対して『日記』のように「つらさは」となったらどう
 であらうか。「鳥の曉鳴きの声のつらさを私はいつも思
 つていました。宮様のよう今朝だけではなく、いつも
 いつもそのように感じていました。」という、宮に対す
 る一途な思い、いつも待っているといういじらしさが出
 ているのではないか。「ころしつ」という茶化すような
 感じで後朝の別れのつらさを詠んだ宮に対して、たしな
 めるように、一緒に悪のりをするのではなく、大人な女
 性をアピールしていることにはならないだろうか。一見
 すると、「殺す」を使った『家集』のほうが、二人の気

持ちが添い、遊び心を理解し、一緒になつて言葉を楽しんでいるように見えるが、これは表面的なものにすぎない。わざわざ「殺す」という言葉を使わなくとも、恋人との別れを告げる鶏の曉鳴きが憎くないはずはない。しかし、それをストレートに言うのではなく、「殺しても飽きないほど憎い」というその気持ちを「つらさは」という言葉を使って表している方が、つまり『日記』の表現の方が、帥宮の全てを受け止めることのできる女性、一途に待ち続ける女性、というものがでているのではないだろうか。宮のことを強く思っている気持ちにじみ出た、味わい深い表現になつていられる。

4

『家集』

221 月をみてあれたるやどに眺むれば
月の明かき夜、人に

見ぬこぬまでもなれにつげよと

『日記』

かくて後も、猶間遠なり。月の明かき夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

月をみてあれたるやどにながむとは

見にこぬまでもたれにつげよと

樋洗童して、「右近の尉にさし取らせて来」とてやる。御前に人々して、御物語しておはします程なりけり。人まかでなどして、右近の尉さし出でたれば、「例の車に装束させよ」とて、おはします。

『家集』と『日記』では一首にも関わらず三箇所も異なる所がある。「眺むれば」という確定条件に対して、「ながむとは」では理由・目的を表す形となっている。これについては、言葉上の違いはあるものの、意味の上での違いはほとんどないと見てよい。強いて言うならば、「眺むれば」とするよりも「ながむとは」とした方が、

落ち着く印象を与える。次の「見ぬ」と「見に」の違いについては、『家集』のように「見ぬ」としたならば、どのように解釈しようとしても意味が通らない。よって、『家集』の誤りであろうと考えられる。最後に、「なれ」と「たれ」について考えていくこととする。『家集』の使用している「なれ」とは、「敬意を伴わず、対等以下のものに対して使う」（『角川古語大辞典』）とある。詞書からでは、「人に」としかないので誰に宛てたものであるのかは特定できないが、「なれ」という言葉を使っていることから、帥宮に対してではないということはある。『日記』にあるように、「右近の尉」に宛てたとするならば、彼が式部と比較して対等以下であるかどうか、ということとは考えなくてはならない問題となってくるが、ここではとりあえずおいておく。どちらにしても、宮の家来に対して宛てたという形はとったにせよ、宮へ届くことは予想が出来た、もつといえ、宮の許へ

届けるときに一工夫して、家来經由で届けたということである。そうであるならば、いくら宮の家来宛にしたためたものであつても、いささか不用意な一語であつた感
は拭えまい。『日記』においては、「右近尉にさし取ら
せて来」とは言いつつも、実際は「右近尉經由で帥宮に
届けよ」といつているということは勿論のことと言うま
でもない。実際その通りになっている。「たれ」という
不定称を使うことで、「宮様以外の誰に告げよ」というの
ですか」となり、「私には宮様以外に通つている男性は
いないし、宮様だけをお待ちしているのです。」という
ことを表そうとしている。わざわざ第三者を介し、そし
て「他の誰もいない」ということを、疑われた自身の潔
白を表すものとして用いたものである。宮に対する一途
な気持ち、疑念は誤りだと分かつて欲しいという気持ち
が「たれ」を使うことによつて、よりはっきりでている。
よつて、「たれ」を使う方が、この場の状況にはよりふ

さわしいといえる。

『日記』と『家集』の重複和歌は先にも述べたように六五首あり、そのうち四七首に相違がある。そのうちの四首についてのみの検討であるので、十分なものとはいえないだろう。しかし、他の相違和歌についても、『家集』より『日記』の方が場面や状況にふさわしく、またより似つかわしいものが多い。少なくとも、『日記』より『家集』の方がふさわしい、と思えるものはなかった。その中でも、この四首の特徴が特に顕著であつたので、これらについて考察してきた。その結果として、

①『家集』の表現に比べて、『日記』の表現の方が、贈答される対象がより具体的になつており、漠然としていたものから焦点が絞られている。

②具体的な事柄を用いることにより、二人が同じ事を思い、同じ事を考え、気持ちを寄り添わせていく、といったような、心のつながりの深さをみていくことが

できる。

以上のような二点にまとめることができる。

つまり、『和泉式部日記』中の和歌は、『和泉式部集』の和歌に比べて、帥宮と式部の心の緊密性や、心のつながりの深さが読みとれるようになっていゝ、といえる。

二節 連句二首をとおして

前節では、『日記』における贈答歌の方が、『家集』においての歌よりも、より二人の心の交流の深く、より寄り添っている、ということを見ていった。心の交流の深さや、二人の気持ちの一体感をみていくうえでは、一首の歌を二人で贈答しあうという「連句」をみていくと、よりはつきりするのではないだろうか。そこで、ここでは『日記』中の二箇所にある連句を検討していく。ここでは、『家集』と比べてみたところ、二箇所のうち一箇所は、二人の連句が、帥宮一人での贈歌とされている。そこで、『家集』もふまえながらみていくことにする。

1

『家集』

檀の木の老いたるを見せ給ひて

406 ことはふかくもなりにけるかな

2

407 とのたまはすれば
しら露のはなくおくとみしほどに
『日記』

前近き透垣のもとに、をかしげなる檀の紅葉のす
こしもみぢたるを折らせ給ひて、高欄におしかゝら
せ給ひて、

ことの葉ふかくなりけるかな
とのたまはすれば、

しら露のはなくおくとみしほどに
と聞えさすさま、なさけなからずをかし、とおぼす。

『家集』

425 つくづくと泣くけしきを御覧じて
なほざりのあらましごとによもすがら

おつる涙は雨とこそふれ
とのたまはすれば、

426 うつつにて思へばいはむかたもなし
心細き事のたまはせつるを、心みだれて

今宵のことを夢になさばや

『日記』

：：あはれに、何事も聞こしめしうとまぬ御有様
なれば、心のほども御覽ぜられんとてこそ思ひも立
て、かくては本意のまゝにもなりぬばかりぞかし、
と思ふにかなしくて、物も聞えで、つくぐと泣く
気色を御覽じて、

なほざりのあらましごとに夜もすがら
とのたまはすれば、

おつるなみだは雨とこそふれ

御気色の例よりもうかびたることどもをのたまはせ
て、明けぬればおはしましぬ。

なにの頼もしきことならねど、つれぐのなぐさ
めに思ひ立ちつるを、さらにいかにせまし、など思

ひ 乱 れ て 聞 ゆ 。

う つ へ に て お も へ ば い は ん か た も な し

こ よ ひ の こ と を 夢 に な さ ば や

と 思 ひ 給 ふ れ ど 、 い か ぐ は 一 と て 、 端 に 、

し か ば か り 契 り し 物 を さ だ め な き さ は

世 の 常 に 思 ひ な せ と や

く ち を し う も 一 と あ れ ば 、 御 覧 じ て 、 「 ま づ こ れ よ

り と こ そ 思 ひ つ れ 。

う つ へ と も 思 は ざ ら な ん 寝 ぬ る 夜 の

夢 に 見 え つ る う き こ と ぞ そ は

思 ひ な さ ん と 。 心 み じ か や 、

ほ ど 知 ら ぬ 命 ば か り ぞ さ だ め な き

契 り て か は す 住 吉 の 松

あ が 君 や 、 あ ら ま し ご と さ ら に く 聞 え じ 。 人 や り

な ら ぬ 、 物 わ び し 一 と ぞ あ る 。

ま ず 、 「 1 」 の 連 句 に つ い て み て い く 。 帥 官 の 歌 が 、

『家集』では「ことはふかくも」となっているが『日記』では「ことの葉ふかく」となっている、という違いがある。これらの違いは、意味上大きな違いはない。どちらも「秋の深まりや檀の木が変化して深まっていくように、私たちの言葉も深まってきましたね」という二人の関係の深まりを、「ことば」を例にとつて帥宮が詠みかけたものである。しいていうならば、「ことはふかくも」とした『家集』より、「ことの葉ふかく」とした『日記』の方が落ち着く、といった感じを与えるくらいのものである。

その宮の詠みかけに対して式部は、「白露」や「はかなく」を使い、「かりそめの関係かと思つていましたのに」と切り返している。宮が今の二人の関係についてふれたことをふまえて、「最初にはかかない関係だったけれども、二人の関係はふかまってきました。」という時間経過までも表すように膨らんでいる。おそらく宮は、式

部が、自分の詠んだ下の句に、どのような上の句を付けるか興味を持っていたことであろう。どの程度自分を満足させる付け句を即興的に詠むことができるのか、楽しみでもあったはずである。果たして、式部の答えは、宮から「なさけなからずをかし」という評価を受けている。下の句に対して上の句を付ける、という即時性が求められる連句というものをおして、宮はますます、式部の即興的に歌を詠むことができ、また当意即妙の才のある、歌の才能にふれたのではないだろうか。

『家集』においても連句のまま載せられているように、この連句には、「連句」としての醍醐味というものが十分に味わえるようになっていいる。言いかえれば、「連句」として味わわなければならないものだからこそ、『家集』でも連句になっているということである。

それに対して、「2」の連句はどうであろうか。「1」の連句とは違い、『日記』では連句となっているものが

『家集』では、帥宮の歌となっており、形の上からも違っている。『家集』では、帥宮と式部の贈答として完結した形となっている。しかし、贈答歌としてはあまり言葉が対応しておらず、ちぐはぐな贈答歌だといえるのではないだろうか。確かに、意味の上からみると、泣いている式部に対して、「いい加減なあらましごと」なのだから、そんなに泣くことはないでしょう」となだめる宮。それに対して「現実だとは思いたくないから、夢にした」と答える式部、ということでおかしくはない。しかし、「贈答歌」としてみようとした時には、式部の答えが帥宮の贈答の言葉をあまりふまえていない、という点が少し気になる。しいていうならば、帥宮の「なほざりのあらましごと」と式部の「今宵のこと」が対応している、くらいである。では、『日記』ではどうかというと、何も言わず、ただ泣いている式部を見て、「なほざりのあらましごと」に夜もすがら」と詠みかけている。この帥

宮の上の句だけでは意味は完結しない。宮は式部が、「おつるなみだは雨とこそふれ」と下の句を詠むことを、期待もし予測もしていた、と考えることができるのではないだろうか。それは、宮が連句を詠みかける契機となる式部の様子、返事もしないでただ泣いている様子が描かれていることと、その時の外の天気の「みぞれだちたる雨の、のどやかに降るほどなり」とあることから分かるだろう。外では雨が降り、式部はただただ泣いている。このような状態であれば、式部の下の句は想像に難くない。また、宮の「なほざりのあらましごと」で始まり、この場面最後の宮の言葉「あらましごと」で終わることからも分かるように、始めから終わりまで一貫しており、宮が式部をなだめているという一連の展開がある。

『日記』と『家集』とでは、どちらの形の方が正しく適切なのか、またはどちらが基となっているとか、ということは断定することは難しい。『家集』のように、帥

宮一人が詠んだものを、二人の心の交流の深さをみせるために、二人で連句を詠みあったという形をとったということも考え得る。逆に、『日記』のように二人での贈答が基としてあり、その場面を要約するような形で『家集』のようにまとめた、ということも考え得る。これは簡単に結論付けてよい問題ではない。このように、どちらとも考えられるのは、ひとえに、式部の下句が帥宮の上の句に添う形で付けられている、という贈答形式になっていることに拠るだろう。これは、「連句」の醍醐味ともいえる、二人の掛け合いや切り返しとは違うけれども、宮の意識を汲み、寄り添っているような付け句となっており、まるで一人が詠んだかのような一体感をみていくことができる。

「1」も「2」も、趣は違っているが、どちらも「連句」としての面白さを十分に表しているのではないだろうか。「1」は連句として、二人で言葉を楽しみ掛け合

いを楽しんでいる。逆に「2」では、気持ちをぴったりと添わせて、一体感を十分に印象づけている。宮の詠みかけたものに対して、即興的に当意即妙の歌を詠むということが「連句」の醍醐味ともいえるわけではあるが、それだけではなく、二人の気持ちが一体となっていて、うな歌を詠みあっているというところで、式部の才能が際だつとともに、その式部に想いを深めていく宮の姿もみえる。

一般的に「連句」の味わいとも言える切り返しややりこめる姿だけでなく、気持ちを添わせ、一体感の見える「連句」を配しているところにこの『和泉式部日記』の特徴がみられるのではないだろうか。

第三節 一般的な贈答歌との比較をとおして

前節までは、『和泉式部日記』と『和泉式部集』との日記重出歌を比較していくことにより、『和泉式部日記』の特徴を考察していった。すると、帥宮と式部との贈答は、互いに寄り添い、理解を深めていつているものが多く、ということが分かった。しかし、新谷正雄氏の「贈答歌の表現論理^{（9）}」という論文の中に、相聞贈答歌は「男の懸想と女の反発とか切り返しとかいった掛け合い表現をとる」とあるように、一般的に言われている贈答歌とは、男性から贈られた歌に対して女性は、贈歌をふまえつつも切り返していく歌がよい歌だとされている。『和泉式部日記』の中に出てくる贈答歌は、全てがそうというわけではないが、一般的な贈答歌とは、

① 式部の返歌は、贈歌をふまえつつも、切り返していく歌だけではなく、寄り添うような歌を詠んでいる。

② 女性である式部から詠みかけている歌がある。
という二つの点で異なっているものも多くある。

まず、①の点から考察していく。贈歌に寄り添って
くように返歌をしていくのが式部の読み方の特徴なので
あろうか。『和泉式部集』の中から、日記重出歌以外の
贈答歌をみてみる。

1

243 忘れ草摘む人ありと聞きしかば
津の国の人のいひおこせたる

見にだにも見ず住吉の岸
かへし

244 忘れ草摘むほどこそ思ひつれ
おぼつかなくて程の経つれば

2

247 今日この同じ男、又、山吹の散りはてたるに
今日もまた何にか来つる一重だに

散りも残らず八重の山吹

かへし

248 散りにきといひてややまん山吹の

折り枯らしたる枝はなしやは

『家集』に載っている贈答歌がこれだけと言うことはないが、この二首を見ても明らかのように、相手に対して寄り添わせていこう、と言うよりは、切り返していこうとか、やりこめてしまおう、といった気持ちの方が出ているのではないだろうか。また『日記』のなかでも、

3

賜はせそめては、また、

うち出でもありにしものを中々に

苦しきまでもなげく今日かな

とのたまはせたり——略——はかなきこともめとゞ

まりて、御返、

今日の間の心にかへて思ひやれ

4

ながめつゝのみ過ぐす心を

又御文あり。ことばなど少しこまやかにて、

語らば慰さむこともありやせん

いふかひなくは思はざらん

あはれなる御物語聞えさせに、暮にはいかゞ」との

たまはせられば

慰むと聞けばかたらはまほしけれど

身のうきことぞいふかひもなき

『生ひたる蘆』にて、かひなくや」と聞えつ。

5

ひたぶるに待つともいはばやすらはで

ゆくべきものを君が家路に

おろかにやとおもふこそ苦しけれ」とあるを、なに

か、こゝには、

かかれどもおぼつかなくも思ほえず

これも昔のえにこそあるらめ

と思ひ給ふれど、慰めずは、つゆ」と聞えたり。

「3」では、宮の「今日一日嘆いています」という「なげく今日かな」という言葉をとらえて、「私は今日一日だけでなく、長い間物思いに沈んで暮らしています」という「ながめつゝのみ過ぐす心を」とを対比させてやり返している。「4」では、「会い語らいましょう。きつと慰められますよ」という宮に対して「慰められるのなら」と乗り気の様子を見せるのかと思うと、「慰められることは無理ですわ」と断っている。宮の使った「慰め」をキーワードとして式部は、「私の気持ちは語らうくらいで慰められるくらいのもではない。だから会わない」と切り返している。「5」では、「慰めずはつゆ」と「慰めていただけないならば露のように消えてしまいそうです」と弱気なことを言っているが、少なくとも歌では、「ひたすらに待っていると言うならばすぐにでも訪れる

のに「と、訪れないことを相手（式部）のせいにした詠み方をして、いる宮に対して、「昔からの因縁があるのだから、お越しがなくても不安だとは感じません」と反発し、言い返しているのである。

以上のことから、同調していくのが式部のいつもの詠み方であり式部の特徴だ、と決めつけることはできない。だが、前節までで考察してきたように、心を添わせ、宮の歌に同調していくような歌も多くある。確かに、一般的な贈答歌からみていくと特殊かもしれない。しかし、二人の愛が深まり、お互いの気持ちが高まっていく時に、同じ時を、モノを、そして気持ちを共有していかうという姿勢は、極めて自然なことといえるのではないか。このように考えていくならば、この『和泉式部日記』では、あえて一般的によい歌だとされる、切り返しややり返す返歌にこだわらず、二人の気持ちの一体感を強く印象づけるようにした、と考えることができる。

次に②について考えていく。普通贈答歌とは、男性から贈られた歌に女性が返歌していくという形態をとる。女性から歌を贈るなどということは考えられないことではないだろうか。『和泉式部日記』の中で式部が詠んだ歌は七六首（連句二句は二首に数える）ある。その中で、宮から贈られた歌に返歌をする、いわゆる、普通の形式の贈答歌はおよそ半分の三七首である。残りの三九首から宮から頼まれた代表作一首、『伊勢物語』からそのまま引用された歌一首、そして、手習文のように書いた歌四首を除いた三三首が、式部から詠みかけた歌となる。この式部からの詠みかけた歌も、二種類に分けることができる。

一つ目は、宮からの言葉やきっかけが与えられて式部が贈歌を詠みかけていくもので、これらは一四首もある。これは、確かに一見すると、男性から贈られたものに返歌していく、という形式はとっていないように思われる

が、宮の言葉などに対して返歌をしていると考えるならば、贈歌のように見えながらも、返歌としての役割も果たしているので、純粋な詠みかけとは言い難い。それでも、二人の関係のきつかけともなった、

……（小舎人童）「……いとけちかくおはしまして、『つね

に参るや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と申し候ひつれば、『これもて参りて、いかゞ見給ふとて奉らせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花を取り出でたれば、「昔の人の」といはれて、「さらば参りなん。いかゞ聞えさすべき」といへば、ことばにて聞こえさせんもかたはらいたくて、なにかは、あだくしくもまだ聞え給はぬを、はかなきことをも、と思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥

聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、こ

の童かくれの方にけしきばみけるけはひを御覧じつ
けて、「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出で
たれば、御覧じて、

同じ枝に鳴きつゝをりし時鳥

声はかはらぬものとしらずや

と書かせ給ひて、給ふとて、「かかる事、ゆめ人に
いふな。すぎがましきやうなり」とて入せ給ひぬ。
もて来たれば、をかしと見れど、つねはとて御返聞
えさせず。

をみていくと、宮から花橘を贈られたものに対して、「故
為尊親王ではなくあなたの声を聞きたい」と返事をして
いる。もちろん、きっかけは帥宮が与えている。宮は式
部がどのような反応をするか、どのような返事をするか
試したのだろう。それも分かっている。積極的に、自分から詠み
ているような歌を詠んでいる。積極的に、自分から詠み
かけるような歌を詠んでいつているのであるから、やは

り普通の贈答歌の形式とはいえないかもしれない。だが、式部から詠みかけたものだ、と位置づけるのも問題があるのである。

二つ目は、純粹に式部からの詠みかけとなっている歌で、これは一九首ある。一口に式部からの詠みかけとはいってもさまざまな場面であつたのである。その場の思いつきのように見える。しかしこれらは、幾つかのパターンに分けていくことができる。

まず一つ目として、宮からの言葉や贈歌一首に対して式部が二首詠んでいる、というものがある。形の上では返歌に見えてしまう。ところが、式部の二首目の歌から新たな贈答が行われていると考えることができるので、式部からの詠みかけ、という形式に入れた。例えば

7

その夜の月のいみじう明かく澄みて、こゝにもか
しこにもながめ明かして、つとめて、例の御文つか

はさんとて、「童参りたりや」と問はせ給ふほどに、
女も霜のいと白きにおどろかされてや、

たまくらの袖にも霜はおきてけり

けさうちみればしろたへにして

と聞えたり。ねたう先ぜられぬる、とおぼして、

つま恋ふと起き明かしつる霜なれば

とのたまはせたる、今ぞ人参りたれば、御気色あし
うて問はせたれば。「とく参らでいみじうさいなむ
めり」とて取らせたれば、もてゆきて、「まだこれ
より聞えさせ給はざりけるさきに召しけるを、今ま
で参らずとてさいなむ」とて御文取り出でたり。「昨
夜の月はいみじかりし物かな」とて、

寝ぬる夜の月は見ると今朝はしも

起きゐて待てど問ふひともなし

げに、かれよりまづのたまひけるなめり、と見るも
をかし。

まどろまでひと夜ながめし月みると

おきながらしもあかしがほなる

と聞えて、この童の「いみじうさいなみつる」といふがをかしうて、端に、

しものうへにあさひさすめりいまははや

うちとけにたる気色みせなん

いみじうわび侍るなり」とあり。「今朝したり顔におぼしたりつるも、いとねたし。この童ころしてばや、とまでなん。

朝日影さして消ゆべき霜なれど

うちとけがたき空の気色ぞ

とあれば、「ころさせ給ふべかなるこそ」とて、君はこずたまくみゆるわらはをば

いけともいまはいはじとおもふか

と聞えさせたれば、笑はせ給ひて、

ことわりや今はころさじこの童

忍びの妻のいふことにより

手枕の袖は忘れ給ひにけるなめりかし とあれば、

人しれず心にかけてしのぶるを

わするとやおもふたまぐらの袖

と聞えたれば、

ものいはでやみなましかばかけてだに

思ひ出でましや手枕の袖

の、「しものうへにあさひさすめりいまははやうちとけ
にたる気色みせなん」の歌が挙げられる。これは宮から
の贈歌に対する返歌とは別に、それまでの流れとは違つ
たものを作り出しているものである。しかし、これらは
式部からの贈歌となり、話題を提示したことにはなるが、
純粹な詠みかけとは、やはり言い難いかもしれない。

二つ目は、これは特異な場面といえるが、宮が式部を
連れだし、別の場面で逢瀬を持った翌朝のことである。
宮は「御送りにも参るべけれど、明るくなりぬべければ、

ほか「にありと人の見んもあいなくなん」と言つてその場に留まり、式部だけを家に帰す。

8

女、道すがら、あやしの歩きや、人のいかに思はむ、思ふ。あけぼのの御姿のなべてならずみえつるも、思ひ出でられて、

宵ごとに帰しはすともいかでなほ

暁起きを君にせさせじ

苦しかりけりとあれば、

朝露のおくる思ひにくらぶれば

たゞに帰らん宵はまされり

さらにかゝることは聞かじ——略——

普通の逢瀬では、男性が女性の許へ通うという形であり、翌朝は帰つて行つた男性が後朝の文を詠むのが礼儀である。しかし、この場合は全くの逆になっている。式部が宮のもとを訪れたのではないが、状況としては、暁起き

をして帰って行つたのは女性である式部の方だ。だから、いつもとは逆のパターンで、式部の方から詠みかけたと考えられないだろうか。翌日も同じ場所で開催を、宮は式部を家まで送り、式部の家から宮が帰っていく。この日は普通通り宮から贈歌が贈られている。実際は、一日目の式部からの詠みかけは、なかなか後朝の文を贈ってこない宮に業を煮やしただけかもしれないが、『日記』にはそのような書き方はされていない。よって、逆の立場に立った二人が、示し合わせたようにこのような行動をとった、と読んでいってもよいだろう。

9 三つ目は、前出の「7」の場面や、

かくのみ絶えずのたまはすれど、おはします事は
かたし。雨風などいたう降り吹く日しも訪れ給はね
ば、人少ななる所の風の音をおぼしやらぬなめりか
し、と思ひて、暮つ方聞ゆ。

しもがれはわびしかりけり秋風の

ふくにはをぎのおとづれもしき

と聞えたれば、かれよりのたまはせける、御文を見れば、「いとおそろしげなる風の音、いかゞとあはれになん。

かれはてて我よりほかに問ふひとも

あらしの風をいかゞ聞くらん

思ひやり聞ゆるこそいみじけれ」とぞある。

のような場合がある。これら二箇所は、いずれも式部から歌を贈っているが、「7」については、宮も式部と同じく霜の白さに感動して、式部に歌を贈ろうとしていた。しかし、手紙を取り次ぐ小舎人童が遅参したので、先に式部から歌が届き、悔しがっている。「9」についても、雨風がひどいのに、便りも訪れもない宮に対して式部が「秋の頃は訪れて下さったのに、霜枯れで侘びしい時なのに訪れて下さらない」と訴えている。しかし、実

際は「かれよりのたまはせける」とあるように、宮の方
 からは手紙を出していた。どういふ状況で遅くなったの
 かは分からないが、この宮の手紙は、決して式部の手紙
 を見た後で出されたものではない。行き違いになつてし
 まつた形である。これら二首からいえることは、式部か
 ら詠みかけたことに違ひはないが、實際は宮からも出さ
 れていたというところである。宮から贈られた手紙に返事
 をする、というだけより、宮も式部も同じように便りを
 出していた、というこの状況の方が、同じものを見て、
 同じように感じたり思ったりしている、ということが際
 だつてこないだろうか。

四つ目は、式部の「訪れて欲しい」といふ気持ちを詠
 んだ詠みかけである。

晦の日、女、
 時鳥世に隠れたる忍び音を

11

いつかは聞かん今日も過ぎなば
と聞えさせたれど、人々あまた候ひけるほどにて、
え御覧ぜられず。つとめて、もて参りたれば、見給
ひて、

忍び音は苦しきものを時鳥

こだかき声を今日よりは聞け

とて、二三日ありて、忍びてわたらせ給へり

かくて後も、猶間遠なり。月の明かき夜、うち臥
して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮
に聞こゆ。

月をみてあれたるやどにながむとは

見にこぬまでもたれにつげよと

樋洗童して、「右近の尉にさし取らせて来」とてや
る。御前に人々して、御物語しておはします程なり
けり。人まかでなどして、右近の尉さし出でたれば、

「例の車に装束させよ」とて、おはします。

「10」の歌は「今日いらしてください」と期限限定で詠みかけている。「11」は一節の「4」で考察したように、右近の尉經由で宮に「見に来て欲しい」と詠みかけている。どちらも「訪れて欲しい」ということを詠みかけているのだが、どこかしら趣向を凝らしている。また、これらが詠まれる前には、「日ごろになりぬ」や「猶間遠なり」という、「ずっと訪れがなかった」という言葉が書かれている。訪れがなく、それにたえきれずに自分から詠みかけた、という体裁だ。「『待つ』ことは平安文学の重要な要素である『蜻蛉日記』に描かれた待つ身の苦節や、物語文学のそこここに登場する待つ女の姿は印象深い。無論恋歌においても、待つ思いは様々な角度から歌われているのである」⁽¹⁰⁾という鈴木宏子先生の論があることをはじめとして、訪れのない男性をずっと待つ女性、というものが評価されているこの時代に、あえて「訪

と　て　れ
こ　い　て
ろ　る　欲
が　。　し
、　「　い
こ　待　」
の　つ　と
『　だ　い
日　け　う
記　の　こ
の　女　と
特　性　を
徴　で　詠
と　は　ん
い　な　で
え　い　い
る　女　く
の　性　式
で　を　部
は　描　を
な　い　描
い　て　い
か　い　て
。　く　い　つ

第二章 地の文からみる『和泉式部日記』の特徴

第一節 「詞書」と「地の文」の比較をとおして

和泉式部日記は、その中に一四〇首余りの和歌を含み、本文中に和歌の現れる頻度は、伊勢物語にも匹敵するほどである。そしてそれらの和歌はほぼすべてが贈答歌であり、この作品が贈答歌によって成り立っていると言われる所以ともなっている。いきおい、和歌以外の会話・心中推移の部分あるいは地の文といった散文部分は、和歌と和歌をつなぐ役割を果たすものというように、和歌に対して従属的な位置にあるものと見なされがちであり、作品の鑑賞は贈答歌を中心になされてきた。この作品において和歌は基本的に自立しており、地の文は和歌に付随するものととらえられる傾向にあるのである。

（「和泉式部日記の散文」菅原領子⁽¹⁾著）
 このように指摘されているように、『和泉式部日記』
 の研究をしていくにあたり、「地の文」に重点が置いて
 あるものはほとんどないようである。この菅原先生の論
 も、部分的な地の文の考察はされているが、地の文全体
 について論じておられるわけではない。

この節では、『和泉式部集』の「詞書」と『日記』中
 の「地の文」を比較していくことで、『日記』としての
 価値、ひいては『日記』でなければならぬ理由、とい
 うものを考えていくこととする。

『和泉式部集』における日記重出歌群は大きく二つの
 種類に分けることができる。清水博士の分けておられる
 歌群¹別にいうと、B歌群の中に一箇所、E歌群の中に二
 箇所でてくる。そこで、それぞれの歌群について考察し
 ていくことにする。
 まずは、E歌群について考えていく。このE歌群にお

ける詞書には、「人に」や「人の返り事に」とだけしか
ないものが多くあり、詞書だけからでは、詠まれた状況、
場面がよく分からない。

1

『家集』

人恋ひしきに

899 をしまれぬ涙にかけてとまらなん

心もゆかぬ秋はゆくとも

900 君をおきていづちゆくらん我だにも

うき世の中にしひてこそふれ

『日記』

晦方に御文ある。日ごろのおぼつかさなどいひて、
「あやしきことなれど、日ごろものいひつる人なん
遠く行くなるを、あはれといひつべからんことなん
一ついはんと思ふに、それよりのたまふ事のみなん
さはおぼゆるを、一つのたまへ」とあり。あなした

り顔、と思へど、「さはえ聞ゆまじ」と聞えんもいとさかしければ、「のたまはせることは、いかでかとばかりにて、

をしまるゝなみだにかげはとまらなむ

こゝろもしらず秋はゆくとも

まめやかには、かたはらいたきことにも侍るかな」とて端に、
「さても、

君をおきていづちゆくらんわれだにも

うき世の中にしひてこそふれ

とあれば、「思ふやうなりと聞えんも見しり顔なり。あまりぞ推し量り過ぐい給ふ、『うき世の中』と侍るは。

うち捨てて旅ゆく人はさもあらばあれ

またなきものと君し思はば

ありぬべくなん」とのたまへり。

『家集』では、899番の歌に「人恋しきに」との詞書しかない。これでは「出ていく人に対して」ということで、誰に対してという限定はされていない。「恋人」でなくともよいということになってしまふ。900番には詞書が書かれていないので、どのような状況なのかは分からないが、「君」と呼ばれる人をおいて、「君」の恋人が去つて行く様子を作者が見ている、という状況を見ることのできるのではないだろうか。去つて行く人に対する歌となつてゐることは変わりがないが、少し複雑になつてゐる。しかも、899番と900番が一続きのものなのかさえはつきりしない。仮に、一続きのものとしてみるならば、男が女のもとを去つて行き、それを作者が見ている、ということになり、『日記』の状態と重なってくる。『日記』を知っているならば、『日記』と『家集』は重なるものであり、「人恋しきに」の「人」と「君」とは別の人であり、つながったものだということが分かる。けれ

ども、『家集』の詞書だけでは、やはり詳しくは分らない。『日記』では、宮が式部に離れていく人に対する歌の代作を頼んでいる。その離れていく人を式部は宮の恋人だと考え、「をしまる」の歌を詠む。そして、宮に對しても、「君をおきて」の歌で、離れていく人と自分を重ねて比べて見ている。式部の歌人のプライドとして「詠めません」と断ることもできず、かといってすんなりとは詠みたくない、という気持ちの揺れまでも描かれていつている。

2

『家集』

夕暮れに聞えさする

878 またましもかばかりこそはあらましか

おもひもかけぬけふの夕ぐれ

『日記』

…御文やあらんと思ふほどに、さもあらぬを心うし

と思ふほども、すきぐしや。帰り参るに聞ゆ。

待たましもかばかりこそはあらましか

思ひもかけぬ今日の夕ぐれ

御覧じて、げにいとほしうもおぼせど、かゝる御
歩きさらにせさせ給はず。北の方も、…暗きほど
にぞ、御かへりある。

ひたぶるに待つともいはばやすらはで

ゆくべきものを君が家路に

おろかにやと思ふこそ苦しけれ」とあるを、…

『家集』では、「夕暮れに申しあげた」という詞書し
ないので、何故、どうして詠んだのか、ということ
は読みとることはできない。しかも、上の句の「またまし
もかばかりこそはあらましか」では、嫌味や皮肉を言
つているように聞こえる。そして「おもひもかけぬ」で、
来ないなんて予想もしなかった、ということになる。も
つと言え、来るのが当然だと圧力をかけているような感

じを与える。相手に対して試している感じがみえてしま
うのである。それに対して、『日記』には後朝の今日な
のに手紙もない、という条件が書かれているので、『家
集』のような強さが強調されず和らげられている。それ
に加えて、宮からの手紙がなくつらいと思い、そのよう
な気持ちを持つことを「心憂しと思ふほども、すきぐ
しや」と自省している、という内面まで描き出されてい
る。「訪れて欲しい」という気持ちをストレートには出
せない、でもこの気持ちを分かって欲しい、というせつ
ない女心がこの一首の中に読みとれるのではないだろ
うか。

次に、B歌群についてみていく。B歌群の詞書はE歌
群ほど短く簡単なものはない。誰に、どのような状況で
ということを描かれている。

3

『家集』

帥の宮、橘の枝を給はりたりし

227 薫る香をよそふるよりは郭公

きかばや同じ声やしたると

返し

228 同じ枝に鳴きつつをりし郭公

声はかはらぬ物としらなむ

『日記』

……（小舎人童）「……いとけかくおはしまして、『つね

に参るや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と
申し候ひつれば、『これもて参りて、いかゞ見給ふ
とて奉らせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花を
取り出でたれば、「昔の人の」といはれて、「さら
ば参りなん。いかゞ聞えさすべき」といへば、こと
ばにて聞こえさせんもかたはらいたくて、なにかは、
あだくしくもまだ聞え給はぬを、はかなきことを
も、と思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥

聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、この童かくれの方にけしきばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

同じ枝に鳴きつゝをりし時鳥

声はかはらぬものとしらずや

と書かせ給ひて、給ふとて、「かかる事、ゆめ人にいふな。すぎがましきやうなり」とて入せ給ひぬ。もて来たれば、をかしと見れど、つねはとて御返聞えさせず。

『家集』でも、帥宮が花橘を式部のもとへ贈ることできつかけは作っている、ということは分かる。しかし、この贈答の状況では、まるで式部が宮を誘っているようにみえる。それに便乗した形で宮が返事をしていることと

なる。これでは、式部の方がこの恋愛に積極的で宮の方が受身的、とも読めてしまうのではないだろうか。それに、多少苦しくはあるが、²²⁷ 番を宮の歌ととり、²²⁸ 番を式部の返歌ととれなくもない。この詞書からでは、曖昧になつてしまふ。それに対して『日記』では、宮が花橘を贈つてきたことで、自分を試しているということを知りながら、「ことばにて聞えさせんもかたはらいたくて」などと自分に言い訳しながら「薫る香の」の歌を詠んでいつている。歌では誘つていつているように、積極的な態度を詠みながら、実は迷つていついた、躊躇していついた、という式部の様子が描かれている。決して、最初から乗り気だつたというわけではない。それは、「薫る香に」の歌を詠む時に「はかなきことをも」と思い、宮の返歌に対しては「つねはとて御返聞えさせず」という態度をとり、宮にあまり軽くみられないようにしようという気持ちを描いてあるところからも明かであろう。宮の方でも、「ゆ

めひとにいふな。」と小舎人童に口止めをしていること
 から、式部に興味はあるけれども、人の噂に上っては具
 合が悪い。積極的におしていこう、式部に対して苦しい
 ほど懸想をしている、という様子はない。お互いに、歌
 の上からはいかにも、これから始まる、始めようとする
 恋に対して、積極的に、楽しもうとしている様子である
 のに、地の文まで含めていくと、どこか踏み出せない、
 ためらいのある心情が説明されていっている。『家集』
 の式部だといかにも恋に手練れていて、こんな恋を楽し
 んでいる男女だが、『日記』の地の文を併せてみていく
 と、ためらい、悩んでいる状態まで反映させながら詠ん
 でいくことができるので、贈答歌自体も味わい深いもの
 になっっているだろう。

『家集』の詞書からでも、「3」のように、その和歌
 の詠まれた背景などが分かるものもある。しかし、『日
 記』では、事情を細かく説明するだけではなく、式部の

気持ちと宮の気持ちのくい違いやずれ、逆に、二人の一体感などもはつきりしてくる。そうやって、心情的なものや、微妙な心の動きなど、細かい所まで理解できるような地の文があることが「日記」文学の特徴といえるのではないだろうか。

言い換えれば、二人のやりとりした贈答歌と、簡単な説明書きでしか表すことのできない「家集」の形式であれば、この二人の恋愛というものは、言葉を楽しみ積極的に、周囲も気にせず突き進んでいった、という具合にだけとられてしまう恐れもある。だからこそ、「日記」という形にこだわり、贈答歌と気持ちのギャップなどを描いていったのだといえる。自分の気持ちを述べていくことのできる「日記」でなければならなかったのである。

第二節

式部が知らないはずのことまでも

描かれている理由

『和泉式部日記』では、「日記」というジャンルであるにもかかわらず、「女」という三人称で描かれている。そればかりでなく、その場にいはいはすの式部が知り得るはずのない、宮の側の描写や宮の心情、世間の噂や宮の北の方の心情までもが描かれている。本節では、この式部が知らないはずのものまでもが描かれている理由を考察していく。

1

① 人々あまた候ひけるほどにて、え御覽ぜさせず。つとめて、もて参りたれば、

② 御前に人々して、御物語しておはします程なりけり。人まかなどして、右近の尉さし出でたれば、これはともに、式部が詠みかけた歌に対して、宮がすぐ

に返事を出せなかった説明である。宮の周囲に人がいたから式部の手紙が宮に届くのが遅くなった。だから、宮の返事が遅れたのだ、という理由が述べられている。『日記』中に描かれていないので推測になってしまいが、これらについては、式部のもとに宮からの返歌を届けた人、おそらくは小舎人童か右近の尉かが、宮の返事の遅くなった理由を式部に話した、と考えられるのではないだろうか。だから、実際に宮から聞いたかどうかは定かではないが、式部が知り得なかったと決めつけるわけにはいかないだろう。式部にしてみれば、自分から詠みかけたのに宮からの返事が遅ければ不安になるであらうし、こういういったやむをえない理由があった、ということを書き明記しておきたかった、という気持ちも理解できるのではないだろうか。

2

① 思ひがけぬほどに忍びて、とおぼして、昼より御

心まうけして、日ごろも御文取り次ぎで参らす右
近の尉なる人を召して、「忍びて物へ行かん」との
たまはすれば……

これは、宮が初めて式部のもとを訪れようとする場面であ
る。宮が式部に向かつて、「今日は昼から準備をして
いた」などということと言った、ということとは考えにく
い。「思ひがけぬほどに忍びて」と宮が思うことによつ
て、式部としては、宮が訪れることは知らなかった、本
当に訪れるとは思わなかった、ということ強調しよう
としたのではないだろうか。また、「昼より御心まうけ
して」と宮が考えることにより、式部に逢うのを楽しみ
にしていた、式部に多大な関心を抱いていた、というこ
とを言外に言おうとしている、とは考えられないだろう
か。

3

① 聞こしめすめすことどもあれば、人のあるにやと

おぼしめして

② 人々方々に住む所なりければ、そなたに來たりける人の車を、車侍り、人の來たりけるにこそ、とおぼしめす。

宮は式部のもとを訪れ、扉をたたいたが、式部の方で気がつかず、扉が開かなかつた時に宮が考えたことである。宮は式部についての噂を聞いているので、あくまでも式部に通う別の男性がいることを疑う。式部が宮の訪れに気がつかなかったのは、①の場合は疲れていたからであり、②の場合は宮が訪れた音が聞こえない上に、同じ家に住む別の人に通つてきている人の車を宮が勘違いし、式部のもとに別の男性が通つてしていると決めつけたのである、ということとをこれと同じ場所で説明している。三回目の同じような場面時には、

③ かひなくはおぼされねど、ながめるとらんにとやらん

と考えている。今までの二回とは、式部は宮の訪れに気がついていたという点と、宮から贈られた贈歌に対して、直接の返歌ではなく、暁起きをしていた時に書いた手習い文的な手紙を送っている、という点で違いがある。そのことで、宮が式部の所に別の男性が通っていたとは考えなかった、もしくはその考えを払拭したのだろう。この場面においては宮の疑念というものは描かれていない。もちろん、扉が開かなかった理由は、

あやし、誰ならん、と思ひて、前なる人を起して問はせんとすれど、とみにも起きず。からうじて起しても、こゝかしこの物にあたり騒ぐほどに、たゞきやみぬ。返りぬるにやあらん、いぎたなしとおぼされぬるにこそ、物思はぬさまなれ、同じ心にまだ寝ざりける人かな、誰ならん、と思ふ。からうじて起きて、一人もなかりけり。空耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほどろにまどはかさるゝ、騒がしの殿の

おもとたちや」とて、また寝ぬ。

と描かれており、式部の落ち度ではなく、周囲の人たちが起きなかったから宮は帰ってしまったと記されている。①や②については、式部が気がつかなくて宮を帰してしまった、ということであるからか、式部には通ってくる男性は宮以外にはいないということ強調している。しかし、自分の落ち度ではなく、周囲のせいで宮を帰してしまった場合は、特にそのようなことを強調しなくてもよい、ということだろう。

4

①御覧じて、げにいとほしうともおぼせど、かゝる御ありきさらにせさせ給はず。北の方も、例の人のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出版でんもあやしとおぼしめすべし、故宮のはてまでそしられさせ給ひしも、これによりてぞかし、とおぼしつゝむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。

② おはしまさんとおぼしめせど、うひくしうのみ
おぼされて、ひごろになりぬ。

③ 今宵もおはしまさまほしけれど、かゝる御歩きを
人々制し聞こゆるうちに、内の大殿、春宮などのき
こしめさんともかるくしう、おぼしつつむほど
に、いとはるかなり。

④ おはしまさむとおぼしめして、薫物などせさせ給
ふほどに、侍従の乳母上りて、一出でさせ給ふはい
づちぞ。このこと人々申すなるは。なにのやうごと
なき際にもあらず。使はせ給はんとおぼしめさん限
りは、召してこそ使はせ給はめ。かるくしき御歩
きは、いと見苦しきことなり。そが中にも、人々あ
また来通ふ所なり。便なきことも出でまうで来なん。
すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがしがし
はじむることなり。故宮をも、これこそゐて歩きた
てまつりしか。夜夜中と歩かせ給ひては、よきこと

やはある。かゝる御供に歩かむ人は、大殿にも申さん。世の中は今日明日とも知らず変わりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御覧じはつるまでは、かゝる御歩きなくてこそおはしまさめ」と聞え給へば、「いづちかいかん。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことぐしう人はいふべきにもあらず」とばかりのたまひてあやしうすげなきものにこそあれ、さるは、いとくちおしうなどはあらぬ物にこそあれ、呼びてやおきたらまし、とおぼせど、さてもまして聞きにくゝぞあらん、とおぼしみだるゝほどに、おぼつかないなりぬ。

⑤ いふかひなからず、つれづれの慰めにとおぼすに、ある人々聞ゆるやう、「このごろは源少将なんいますなる。昼もいますなり」といへば、又、「治部卿もおはすなるは」など、口々聞ゆれば、いとあは

く、しうおぼされて、久しう御文もなし。

ここでは、式部のもとを訪れない理由として宮が思うことが描かれている場面を取り上げた。①、③では、宮は北の方を始め、周囲の人に遠慮をし、外聞を憚っているうちに、式部のもとから足が遠のいている。両場面共に、「おぼしつゝ」んでいる。②は、「待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕ぐれ」と詠みかけた式部に対して、宮は「ひたぶるに待つともいはばやすらはでゆくべきものを君が家路に」と答えている。それに対して「かゝれどもおぼつかなくも思ほえずこれも昔のえにこそあるらめ」と返した式部の歌を読んで、宮が「うひく、しうのみおぼして」と気後れして訪れなかったという場面が描かれている。これは、まだ二人が出会って間もない頃の様子である。宮は自分の予想していなかった返事をもらい、たじろいでしまったのではないだろうか。まだ、式部がどのような気持ちで詠んだ

のかと言うことまでは、思いを馳せることは難しいだろう。気持ちに重なっておらず、すれ違っている、ずれているといつてもいいかもしれない。それでも、「訪れようとは思つた」という宮の気持ちに挿入されることで救われる。なぜならば、このまま別れてしまおうと思つてゐるわけではない、ということとは、読者には分かるからだ。④、⑤では、「おはしまさむとおぼしめて」や「いふかひならず、つれぐ」の慰めにとおぼす」など、宮自身は式部に対して心惹かれるところがあると思つてゐる。ところが、宮の周囲から聞こえてくる式部に対する評価は、多くの男性が通つてくるというものであつた。世間の式部の評価はこの二つ以外にも、

⑥ 又よからぬ人々文おこせ

⑦ すきごとする人々はあまたあれど、たゞ今はともかくも思はぬを、世の人々はさまぐにいふめれ
⑧ いとあやしきものに聞しめしたるを、聞しめしな

ほされにしがな

⑨ すきごとする人のもとより織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず

⑩ (宮邸に)参らんほどまでだに便なきこといかで聞しめされじ、近くてはさりととも御覧じてん、と思ひて、すきごとせし人々の文をも、「なし」といはせて、さらに返りごともせず。

などが出てくる。これらは五つは全て、式部の目や耳にも入ってきていることである。もちろん、宮以外の男性から手紙などを贈られても「嬉しくも何ともない」とは弁解しながらも、決してそれ自身が「噂だ」と否定することはない。「人々あまた」などという表現をみると、むしろ積極的に肯定している、とも読めてしまう。その上で、宮もいろいろな噂を耳にしているのだろう、と気にしているのだ。それでも、⑦のように宮邸入りすることについて悩むほどの仲になっっているはずの二人である

のに、ここで初めて「さらに返りごとくもせず」と出てくるのである。それでは、それまでは、「すぎごとする人々」から手紙を贈られても「目も立たず」などといったおきながら、返事を書いていたのか、と勘ぐりたくなる一文である。それでいながら、宮には噂ばかりが聞こえて、自分のことを誤解されてしまっている。お側近くにいれば、「噂に過ぎなかったのだ」と納得してもらえただろうか、と悩んでいたりする。

これだけ式部自身が、噂も知って更にそれを肯定するような言葉を書いているのだから、④、⑤では、他人の目――宮サイドの目からではあるが――をとおすことによつて、客観性、噂の信憑性が増し、宮がそれに揺れてしまう心も理解できるといふものだ。宮の乳母の言葉は、宮を式部のもとに行かせないための言葉とはいえ、簡単にそれを信じてしまい訪れることをやめてしまった宮を責めることはできない。特に、乳母の言葉は、世間の式

部に対する評価を絡めつつ、式部のもとに宮が訪れるということを続けていたら、きっと不都合なことが起こつてしまうという、宮の周りの懸念を代表したものである。この乳母の言った「反式部感情」ともいえる言葉を言うのは、宮の近くについて大きな影響を与えることができない。また強く意見できる乳母でなければならなかった。宮の家来たちであればさすがに、宮が好意をよせて通っている女性のことをここまでいうことはできないはずだ。せいぜい⑤程度の噂までである。④は二人の関係が始まって、まだ早い段階で書かれている。これは、式部の世間の評価や宮サイドの懸念を描いただけではない。宮と式部との間には大きな障害、式部の周囲にある男性の噂と、宮の周囲の反対、という二つの大きな障害があるということをはっきりと示しておこう、二人の関係は、決して生やさしいものではなく、続けていくのは困難だ、ということを言っておこう、としているのではないだろう

か。

これら①から⑤までについては、式部が直接見たり聞いたりしたものではない。もちろん、「あさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを、おろかなおぼしそ。御あやまちとなん思ふ。かく参り来ること便あしと思ふ人々あまたあるやうに聞けば、いとほしくなん。大方もつゝましきうちに、いとゞほどへぬる」などと宮が式部のもとを訪れられなかつた事情を説明するような場面もあるのだから、このような宮の周囲の人々の反応や反対を式部は知ることではできたであらう。しかし、あえて宮の側に則して書いてある。これは、二人で会っているときにも宮の口から直接式部に話す、という手法をとることかもしれないところであるが、そうではなく、式部が直接見聞きできないところである方が、宮サイドの人の口から描かれる方が、より信憑性、真実味、そして迫力があるからだろう。

① 人のいふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる
② 人の便なげにのみいふを、あやしきわざかな、こゝにかくであるよ、などおぼす。

③ 頼もしき人もなきなめりかし、と心苦しくおぼして、

④ 世に馴れたる人にあらず、たゞいとものはかなげに見ゆるも、いと心苦しくおぼされて、

「4」でも見ていったように、式部の周囲には男性の噂が絶えない。それでも、式部を理解するようになった宮は、「世間で言われているような人ではないのでは」と世間評と目の前にしている式部とのギャップを感じている。このように思いながらも、離れてしまったり、噂を耳にすれば気持ちちが揺れてしまったりはするのであるが。式部はこのような噂を否定するような人物像を、あくまでも宮の気持ちを使つて描いていつている。式部が

「宮以外には頼る男性がない」ということがはっきり書かれているのは、「ことぎまの頼もしき方もなし」という一箇所、しかも宮邸入りを悩んでいる最終段階で描かれていただけである。それまでは「4」の⑥から⑩のような描き方である。自分でどれだけ「宮以外の人は何とも思わない」「噂はあくまで噂であって事実ではない」と言ったところで言い訳にしか聞こえないだろう。ところが、宮の目を通して噂と違った式部が描かれているからこそ、式部の宮に対する想いや、噂は噂であって事実ではない、ということが際だってくるのである。

以上のように、宮の心情や周囲の人たちの心情や会話まで描かれているものは大方五つのグループに分けるとができた。これらは全て、式部が直接宮から聞いた、ということは書かれていない。しかし、これらの事柄が、宮が式部に話して聞かせた、という体裁をとっていたらどうであろうか。やはり、いささか真実味にかけるので

はないだろうか。特に、「5」のような、「噂よりも世慣れしていない式部」というものを、宮が式部に直接言っているのであれば、「お世辞」ともとれなくはない。また、式部自身が「私はそのような女ではない」と言ったところでは、あれだけ噂があれば弁解にしか聞こえないだろう。ここでは、式部はその場では知り得ず、宮が思うこととして描かれているところに重みが出てくるといえるだろう。そして、宮の乳母や周囲の人たちの「式部評価」を、その人たちに言わせ、宮がその話を聞く、という形がとってあることで、「本当のことなのだろう」と思わせてしまいうような迫力も出てくる。さらに、宮がその噂に引きずられて訪れない頃から、式部と深く関わっていくことによって、「噂と実際は違う」と宮自身に気付かせ思わせることで、二人のかかわりの深さ、というもののまで浮き彫りにされてくる、ということがいえる。

つまり、これらは、式部の聞いた話として描くのではなく、このように、宮の關係者に話させるという形をとることで、「真実味」や「迫力」というものも出てくるし、あわせて二人の關係の深まり、というものまでも描きだされていっている。そのために、式部の知らない所で話されたこと、思われたことが、そのままの形で描かれていて、ということがいえる。

第三節 「女」という三人称で描かれている理由

前節の冒頭でも述べたが、普通「日記」というものは一人称で描かれている。女性に仮託した『土佐日記』をはじめとして、最初の女流日記ともいえる『蜻蛉日記』、『紫式部日記』、『更級日記』なども全て「自己を省みる、自分の人生を振り返る」ということであり、一人称で描かれていくのは当然のことである。それにも関わらず、この『和泉式部日記』は三人称で描かれている。そこにはどういう理由があるのだろうか。また、その理由こそがこの『和泉式部日記』の大きな特徴だともいえるのではないだろうか。

先ず一つには、前節でも述べていったように、宮サイドの意見や心情を効果的に使用するため、ということが考えられる。「私」という書き方であれば、あのような超空間に自分を飛ばすことはできるはずもない。宮に直

接聞いたとしたり、自分が宮の言葉から、もしくは世間の噂から推察したり、という書き方しかできないだろう。さらに、宮の気持ちの信憑性、といったものも減少してしまう。自分に都合のいいように描いていったのだろう、と読み手は思うだろう。しかし、はたしてそれだけの理由のために「女」という三人称で描いていったといえるのだろうか。

式部に歌を贈った宮は、小舎人童に最初に「かゝる事、ゆめ人にいふな。すきがましきやうなり」と念を押す。この言葉をはじめとして、前節「4」でも取り上げたとおり、宮は周囲を憚るように、度々世間体を気にするようないふことを思っている。乳母の言葉にもあるように「便あし」きことが起こるのではないか、という懸念もある。式部の方も、「ひともしこそ聞け」「人いかに思はむ」「あな見ぐるし」など、同じく人の目や世間体を気にしている。宮邸入りを決意した式部は、いつもは人の目を

氣にしてためらっていた、宮の車で出かける逢瀬にも、
「今はたゞのたまはせんにしたがひて」と考えるように
なっている。しかし裏返して言えば、それまでの式部は、
宮との逢瀬の時も人目を気にしていたし、宮邸へあがる
話が出た時も、自分の気持ちを考えるより先に、「宮の
そばへあがったら、いったいどう思われるだろう」と考
えている。第三者の目が常に存在している、といえる。
その極致ともいえる一文が、「上は院の御方にわたらせ
給ふとおぼす。」ではないだろうか。二日連続で、式部
の家でないところへ宮が式部を連れ出し逢瀬を持つ。そ
の後に挿入されているのである。宮は、「かく参り来る
ことを便あしと思ふ人々あまたあるやうに聞けば」と、
式部の家に通うことを不都合だと思ふ人が多くいるの
で、別の場所でゆつくり過ごそう、と言ひ、式部を連れ
出す。しかし、式部は「我にもあらで乗りぬ。人もこそ
聞け」と、宮との変わった逢瀬を楽しむというよりも、

人の目を気にしながらとまどっている。二人がともに、人目を気にしながらの――気にしかたに多少の違いはあるが――逢瀬であるならば、一北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど」と宮と北の方の關係はあまりいいものではないとの説明は、先に宮自身の想いでされていくけれども、宮の北の方の目を気にするのは当然であろう。ずっと人の目を気にして、その最期の場面に、宮の北の方の描写が出てきている。とするならば、ここで二人が常に気にしている「人目」とは、世間一般、というよりも、宮の周囲の人々、といえないだろうか。この宮の周囲の人たちの目を気にしながらでなければ二人の關係は築けない、言い換えれば、この二人の關係はとても困難な關係である、ということになる。

これらのことを、式部の「私」という一人称で延々と述べられていったらどうであろうか。式部の独りよがりや、「こんなに困難な關係であるにもかかわらず、宮と

の關係が進行し、愛された」ことを言わんとするがための式部の苦悩のポーズにも見えてきてしまうだろう。だからこそ、「女」という三人称で、客觀的に、宮の気持ちも入れながら描いていったのだといえる。

もう一つ考えられるのは、この二人の關係は最初は「はかなきことをも」や「慣らはぬつれぐ」のわりなくおぼゆるに、はかなきことも目とゞまりて「などとあるように、あまり積極的ではなかった。宮の方も、故兄宮の思い人ということ、關心は持っていたものの、周囲の反對を押し切つてまで式部のもとに通おうなどとはしていない。乳母に対して「はかなきすさびごとするにこそあれ。ことぐしう人はいふべきにもあらず」と言っている。「あやしうすげなきものにこそあれ、さるは、いとくちをしうなどはあらぬ物にこそあれ」と思うように、見所はあるものの、身分的なことなどを考えていった場合困難だ、と躊躇している。

このことを考えていくと、やはり、「私」では、ここまでは表せない。式部の気持ちとして、最初は「ちよつとしたこと」という感覚で出会ったのだが、次第に贈答を重ね、逢瀬を重ねていくにあたって、だんだんと宮に心引かれていった、ということとは描けるであろう。しかし、宮の気持ち、考えは伝わらない。自分勝手な想像にしか過ぎないもので終わってしまうかもしれない。「女」と客観的に表すことによって、次第に気持ちに寄り添っていく、ということが感情だけでなく、客観的に読みとれる、といえるであろう。

「女」という三人称で描いていった理由として、三つほど理由が考えられる。「私」という一人称で表すならば、主観的かつ感情的にならざるを得ない。また、宮の心情というものまでもは描いていけないし、仮に描いていったとしても、リアリティーや迫力に欠けてしまう。自分の、宮への気持ちの昇華だけであれば、一人称で書

い、いたとしても、なにも問題はない。しかし、式部は、あくまでも読み手を想定していたはずである。『大鏡』⁽¹³⁾では

この東宮の御弟の宮たちは、少し軽々にぞおはしましゝ。帥の宮の祭りのかえさ、和泉式部の君とあひ乗らせ給ひて御覽ぜしさまもいと興ありきやな。御車の口の簾を、中より切らせ給ひて、我が御方をば高う上げさせ給ひ、式部の方をばおろして、衣長う出ださせて、紅の袴に、赤き色紙の物忌いと広きつけて、土とひとしよう下げられたりしかば、いかにぞ、物見よりは、それをこそ人は見るめりしか。

このように記され、『榮華物語』⁽¹⁴⁾では、

今年はこの使ひのひびきにて、帥の宮・花山院など、わざと御車したてて物を御覽じ、御棧敷の前あまた度渡らせ給ふ。帥の宮の御車のしりには、和泉を乗せさせ給へり。

— 中略 —

小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御おとうとの君、殿も上も、ともかうもなさでうせ給ひにしかば、いかで女御殿に劣らぬ様の事などをおぼし構へて、東宮の御弟の帥宮に聞えつけ給へりしかば、南院に迎え給へりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなりもて行きて、和泉の守道貞が妻をおぼしさわきて、この君をば事のほかにおぼしたりしかば、居煩ひて、小一条のおば北の方の御許に帰り給ひにしぞかし。と記されている。これらを見ても分かるように、この二人の関係は、当時かなりのスキャンダルな出来事であると同時に、二人でとても目立っていたようである。しかし、実際はこのように軽々しい気持ちからの恋愛ではなかつた、ということが言いたかたのであろう。このようにおおっぴらに騒ぎを起こしておきながら、「私たちの恋はあんな大騒ぎした物ではなく、本当はもつとまじめ

なものだつた」と言つたところで、説得力はない。

二人の贈答歌はともかく、地の文においては、「はかなさ」というものが根底に流れている。人目もあり、維持するのが大変困難な二人の関係、これらを記していくためには、客観的な第三者の目が必要であつたのだ。

だからこそ、この『和泉式部日記』は、「女」という三人称で描かれている、といえるのである。

終わりに

『和泉式部日記』の特徴をみていく上で、第一章では『和泉式部集』と比較することにより、『和泉式部日記』の独自性、というものを考察していった。そして第二章では、なぜ「日記」という形式で描かれたのか、また「女」という三人称で描いていった理由とは何なのか、といったものに焦点をあてて考察していった。

その結果として、『和泉式部日記』中の和歌についていえることは、贈答歌において、二人の気持ちは通い合いい、一体感を持っている。気持치가寄り添っていることがみてとれた。しかし、「地の文」を見ていく限りでは、贈答歌中の気持ちの盛り上がりや、二人の一体感というものとは前面に出てこない。むしろ、気持ちの「はかなさ」というものが根底に流れていたのではないだろうか。実際式部と帥の官の恋は長くは続かない。式部を残して帥

宮が病氣でなくなってしまう。宮邸にあがつた式部であつたが、幸せが長く続いたわけではない。その事があるからであらうか。宮との身分差を越えた夢物語的恋物語、というよりも、現実的な面がある。現実的状况の中におかれた中で、周囲の目を気にしながら二人の關係は進行しているのである。二人のやりとりした贈答歌にだけ目を向けたとしたら、悩みはありながらも、言葉を楽ししみ、恋を楽しんでいるように読めるであらう。しかし、地の文があることで、二人の關係の困難や、すれ違いなども描かれているのである。

贈答歌と地の文のギャップを考えたときに、どちらを作者である式部が強調したかったのかと考えると、やはり、「地の文」であると思われるのである。宮邸にあがつた後に『大鏡』や『榮華物語』で描かれているような、人目をも憚らない、幸せな二人をあえて描かず、宮邸にあがり、北の方が出ていってしまう、という場面で筆を

置いてしまった事にも関わってくる。おそらく式部にとって、宮邸にあがった後の、人があきれかえるような関係ではなく、『和泉式部日記』で描かれているような、二人で悩み、すれ違い、それでもお互いを必要としていたその時を、その気持ちを知ってもらいたかったはずである。自分を残して逝ってしまった宮とのことを思い出した時に、人の噂に上り注目を集めた頃ではなく、人目を忍んで、二人の関係を築いていった、宮邸入りまでの事の方が重要だったのだ、と考えることができる。

この『和泉式部日記』の特徴として、常に第三者の目が存在して、その中で自分が、自分たちがどのように見られてゐるかを気にしている、ということが上げられるだろう。そして、「女」という三人称で描かなければならなかったのは、自分だけの独りよがりではなく、リアリティーを求めたものであった。美化するのではなく、現実として見つめていきたい、事実として知って欲しい、

という式部の気持ちが表れているのではないだろうか。そしてなによりの特徴として、私は、「贈答歌」と「地の文」のギャップをあげたい。贈答歌の一体感と地の文での厭世的な虚無感、対照的なものであるがゆえに、お互いが引き立ちあっている、といえる。

最後に、今後の課題として、『蜻蛉日記』など、他の日記作品と比較していき、より『和泉式部日記』の独自性や「物語的」といわれる所以、などを探っていきたい、と考えている。

注

(1) 「『和泉式部日記成立に関する小考』—— いわゆる

原歌集をめぐって——」・清水文雄著・

『和泉式部日記研究』・笠間書院・昭和62年9月

(2) 「和泉式部日記と和泉式部集」・森田謙吉著・

『和泉式部日記論攷』・笠間書院・1977年

(3) 『和泉式部日記』・清水文雄校注・岩波書店・

1941年7月

(4) 『和泉式部集・和泉式部続集』・清水文雄校注・

岩波書店・1983年5月・

これ以降『家集』はこれによる

(5) 『和泉式部日記』・清水文雄校注・岩波書店・

1941年7月・これ以降『日記』はこれによる

(6) 『和漢朗詠集』(「新編日本古典文学全集19」)・菅野禮行校注訳・

小学館・1999年・10月

(7) 「秋の夜長し 夜長くして眠ること無ければ天もあ

けず 耿耿たる残んの火灯壁に背けたる影 蕭蕭たる暗き雨窓を打つ声 上陽入白」

- (8) 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典日記』(「新編日本古典文学全集」26)・藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注訳・小学館・1994年・9月

- (9) 「贈答歌の表現の論理」・新谷正雄著・「古代文学」・35巻・1995年

- (10) 「へ待つゝ考——『古今集』恋歌の表現——」・鈴木宏子著・『古今集とその前後』・風間書房出版・平成六年

- (11) 「和泉式部日記の散文」・菅原領子著・

「国語国文」67巻12号(1998年12月)

- (12) 清水博士は『和泉式部集』の中の和歌を以下のよう
にAとDの五つの歌群に分けておられる。

- (13) 『大鏡新講』・次田潤著・明治書院・昭和36年4月
A 1と98 B 99と268 C 269と311 D 312と399 E 400と902

(
1
4
) 角川書店・昭和46年5月 『栄花物語全注釈』(日本古典評釈・全注釈)・松村博司著・

参考文献

●『和泉式部日記』・清水文雄校注・岩波書店・

1941年7月

●『和泉式部集・和泉式部続集』・清水文雄校注・

岩波書店・1983年5月・

●『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典日記』

(「新編日本古典文学全集」26)・藤岡忠美・中野幸一・大養廉・

石井文夫校注訳・小学館・1994年・9月

●『和泉式部日記研究』・清水文雄著・笠間書院・

昭和62年9月

●『和泉式部日記論攷』・森田謙吉・笠間書院・1977年

●『和漢朗詠集』(「新編日本古典文学全集」19)・菅野禮行校注訳・

小学館・1999年・10月

●「古代文学」・35巻・1995年

●『古今集とその前後』・風間書房出版・平成六年

●「国語国文」67巻12号(1998年12月)

「和泉式部日記の散文」・菅原領子著

●『大鏡新講』・次田潤著・明治書院・昭和36年4月

●『栄花物語全注釈』(日本古典評釈・全注釈)・松村博司著・

角川書店・昭和46年5月

●『和泉式部の言語空間』・千葉千鶴子著・和泉書院・

1997年9月

●『角川古語大辞典』